秋田県教育カウンセラー協会　第２回“リレーエッセイ”

看護教育における教育カウンセリング

東京医療保健大学
新山　真奈美

看護師を英語で「Nurse」と呼ぶことは一般的だが，この言葉はラテン語に由来し，「nourish」「はぐくむ」という意味をもつ。「はぐくむ」とは，デジタル大辞泉において「親鳥がひなを羽で包んで育てる」や「養い育てる」，「大事に守って発展させる」という意味をもつことから，人々の世話をし，健康や成長，さらには生命維持のために支えることを意味すると推測できる。このことから看護とは，人をはぐくみ，人の世話をする仕事であり，看護師は人の命を守り，健康維持増進や疾病予防にむけて看護ケアを実践していくプロフェッションとして重要な役割を担っているといえる。

昨今，テレビや映画などによる美化した医療職への憧れから，進学する学生も非常に多い。また最近の傾向として，子の特性を理解しないまま資格が取得できるや高収入等をイメージして，家族に勧められ，自身の思いを抑えて進学する学生も多い。こういった学生においては，特に学生生活の中での挫折感を味わう機会が多い。美化された看護師と，実際に学ぶ看護師の姿のギャップに困惑し挫折する学生も多い。さらには看護につながる多方面の学習をすることから単位未修得となり，留年に陥るケースも多い。昨今の傾向としては，COVID-19 の影響からコミュニケーション能力に支障をきたす学生が増加している。教員や同級生と関係性がとれない，遠隔授業は出席できるが対面授業は出席できない，病院実習では患者や看護師にも声をかけられない，ネガティブな部分を指摘することでの学生とその親による攻撃反応等の非常事態が起きている。さらにちょっとしたことにおいても過剰なストレス反応を示したり，心に負荷を感じる学生が多くなってきていると感じる。以前は就職してから起きていたバーンアウトが，現在は大学教育の中からすでにバーンアウトに陥りやすいこと，そして，学生がバーンアウトに陥ることで心身の健康を害し休学や退学に至ること，ここにつながらなかったとしても学力の低下や目的意識が見つからずに途方に暮れる現状も見受けられる。

自分の理想とする看護師像を見つけ近づくためには，モチベーションを管理する必要があるといえる。看護学生のレジリエンスの実態と影響要因を明らかにした研究[1)]では，自己効力感や自尊感情が影響していることが示唆されている。このことから，著者が担当する「老年看護学」の授業においては，ロールモデルとして，授業内に高齢者や疾病のある方を招待し，疾病と闘う人々やご家族の思いを理解する場面を作っている。実習においては，看護師と職業について直接話を聞くという場面を作り，人の生命にかかわる重要な役割である看護師としての意識づくりをした。これによって，学生自身が選んだ道の重さを感じる一方で，ポジティブな意見を聞くことにより看護の奥深さを知り，看護師として働く自身を想起できる場にもなったとの意見もあった。このような経験型学習や心理的サポート等により，自己効力感や自尊感情モチベーションが保たれ，バーンアウトを少しでも回避できてきていると実感する。学生が将来を肯定的にとらえることができ，看護師という目的意識を持ちながら，想定外の出来事に遭遇しても挫折することなく，教員が根気強くかかわらなければならない時代に突入したと感じる。看護学生のレジリエンス育成に向けて，教員は学生の感情調整し，評価においてもポジティブフィードバックや受容メッセージ，ロールモデルの提供を示すことが重要であると感じる。また今後は，これまで以上の，一層の個々の学生の特性に応じた教育的支援も重要になると考える。

1) 福重真美，森田敏子：看護学生のレジリエンスへの影響要因と教育的支援，Japanese Journal of Applied Psychology ，Vol.39，No.1，19-24，2013.